

箱物語

SATO 1940

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

会話主体。というか会話オンリーな物語シリーズの日常会話的な二次創作的ななにか。

コイツとコイツの会話が読みたいとかリクあればネタにするから言うて。

目次

忍貝曆。なんか並べたら不穏な空気。	1
曆影臥。モノの影は臥せるってか？	4
曆忍斧。刃物がいつぱいだな。	8
宵曆戦。正月なので神社にでも行くか？	11
撫余曆翼？。豪華四人立て。	15
扇曆炎姉妹。パンはパンでも食べられるパンはなんだ？	19
曆戦斧忍。僕はチョコあまり好きじゃないの。	22
刀扇忍曆。少し雰囲気を変えてみたよ？	25
宵斧曆。雛祭りネタとか書いていたけれど一ヶ月以上経ったから消しちゃった。	28
戦曆忍貝。知らなかったのかい？肉は野菜と食べると美味しいんだよ？	31
だよ。	35
曆戦専門家。作者の頭にニキビみたいなのできたんだけれど？	38
阿忍羽戦八。リアルにもう11月近いのに蚊が飛んでる。	40
神千羽炎姉妹。扇ちゃんのヒロイン本がないのはどうかと思うよ？	43

忍貝曆。なんか並べたら不穏な空気。

「阿良々木くんって確か彼女できたんだよね？あの、蟹の子で背の高
い」

「ん？ああひたぎな。それがどうかしたのか？」

「あれだけ背の高さが違うと、立ちバックが大変そうだよね〜ハハハ」
「……………余計なお世話だ。それに、僕とひたぎは清い関係と貫いてい
るさ」

「へーそうなのかい。てつきり阿良々木くんのことだからエロ同人の
ようにやりまくりかと思ってたよ。阿良々木ハーレムの中でね」

「ツツコミたい所はいくつかあるけれど忍野。ひとつだけ訂正する
ぞ。阿良々木ハーレムなんてものは存在しない。僕はひたぎ一筋だ」

「へー、もうすぐ子供ができるんだ。名前付けられたら教えてね」
「今の会話の流れでどうしてそうなる!?それにまだ僕とひたぎは結婚
すらしていないよ!」

「ハハハ。いつも元気がいいね阿良々木くんは。じゃあいつ結婚する
んだい？互いにもう結婚してもいい年だろ？このまま結婚せずにい
て自然消滅してしまう気かい？」

「……………そ、それは」

「まあ君たちに限ってはそんなことなさそうだけれどね。阿良々木く
ん。彼女も相当な覚悟を決めているはずだよ。いつまでも待たせて
ないでいい加減自分の方からアプローチしてあげたらどうか？」

「……………それこそ本当に余計なお世話だ。忍野。お前に言われなく
てもそうするつもりだよ」

「ハハ、そうかい。じゃあ後ろにいる彼女に声をかけてあげたらどう
かな？さつきから殺気のようなものを向けてきているからね……………
困ったものだよ」

「あ……………———すまん忍野。また今度な」

「ふ……………いいよ……………———若さっていいねえ」

「よおケロ口木。久しぶりだなあ」

「人の名前を地球を侵略しに来たケロン軍の軍曹みたいに呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ。って、それは八九寺の芸風だろうが！それになんでこの町にいるんだ貝木！」

「おっとこれはすまない。噛みました。…… 八九寺？ああそうか、今あの町にいる神様だけか？そうかこれはアイツの芸風なのか。ならばちゃんと借用書を書いておかなくてはな、もちろん、払う気などこれっぽっちもないがな。それと阿良々木。ここはあの町の隣町だ。だからあの町には一切踏み込んでないし、ここでお前に出会ったのはただの偶然だ」

「違うわざとだ」

「噛みまみぎゅ…… なぜアイツはわざわざ言いにくい言葉を噛まずに言えるんだ。それが不思議でならん。それと阿良々木。めんどくさいからって2つの話題の受け答えをまとめるんじゃない。そんな横着ばかりしていると碌な大人になれねえぞ」

「貝木、それはお前だけには言われたくないセリフだ。カンペがあるうと関係ない」

「阿良々木。お前はバカなのか？なぜカンペとか言うんだ。これじゃ俺の名演技だ台無しじゃないか。第四の壁をぶち破っていいのはデッドプールだけっていうのは常識だろうが」

「一体それはいつ決まったんだ！しかも僕の前にはカンペがないぞ！ニヤついて親指立ててんじゃないやねえよ監督！だから嫌だったんだ！神原が監督だって言うのは！」

「阿良々木。いくらお前がするがの世話をしてくれていたからって言うっていいことと言ってはならないことがあるぞ」

「お前は今どの立場にいるんだよ！キャラがブレブレじゃないか！」

「うるせえぞ阿良々木。もうガキじゃねえんだからギャーギャー騒ぐな。舌を切り落とすぞ」

「カンペをガン見しながらセリフをガン無視してんじゃないやねえ！ああもうメチャクチャじゃないか！どうしてくれるんだ！」

「知らん。俺は俺のやりたいようにやっているだけだ。それにこの流れを生み出したの誰でもない。お前だぞ、阿良々木」

「それとな阿良々木。いや、読者。作者はこれ以上ネタがないらしい」

曆影臥。モノの影は臥せるってか？

「のう阿良々木。ひとつ聞きたいことあるんやけれどええか？」

「い、いいですけど。聞きたいことって何ですか？」

「前回忍野のやつちやがいとつた阿良々木ハーレムってやつ。あれホンマにないんやな？」

「……ないですよ」

「おどれなんで返事遅れたんや。心配するやんか」

「本当にないですって。それに前回言ったじゃないですか。僕はひたぎ一筋だって」

「せやたっけ？じゃあ愛人は誰になるんや」

「そりやもちろん八九寺……ってなに言わせるんですか！」

「余接はどの立ち位置にいるんやろな思って」

「斧乃木ちゃんは……妹、ですかね」

「おどれはやっぱアホやわ。どこの世界に妹に妹の上半身消されたりチューされたり火事から救われたり指先に立たされたりする兄がおるねん——そんな奴に余接つけてた思うたら寒気がしてきたわ。頼むからおどれはまだ童貞って言ってくれや」

「童貞ですよ。まだ——童貞ですよ」

「まあまあそんな悲壮な面持ちで告白すんなや。なんならウチが貰たろか？その童貞」

「高校生の頃なら多少の魅力は感じたかもしれないですけど、今はひたぎが居ますから」

「どんだけ思春期やったんやおどれ——しかし、そないな言い方されると振られた気分やわ——ウチも女やからな、傷つくわ」

「……すみません」

「でもまあ、これからも余接のこと頼むわ。余接とそのひたぎなんていうやつちやのドロドロした三角関係は見たくないからな。そんなのは昼ドラで十分ちゆうもんや」

「ええ」

「こよみーん、お久しぶり」

「あ、臥煙さん。お久しぶりです」

「ねー本当にお久しぶりだねー、こうやって久しぶりに顔を合わせたわけだし——何か話そうか」

「何を話すんです?」

「そうだねー何を話そうか——ぶつちやけネタ切れなんだよねー。なんでも知ってるお姉さんを謳っちゃいるけれど、それでも中身は人間だ。限界はあるのさ」

「なんでも知ってる——そういえば、臥煙さんの呪いってなんなんですか?」

「流石こよみん、お姉さんの予想してた中でも最も低い確率で話題に上がると思ってた話を初っ端から出してくるんだね。それは恐れ知らずというか命知らずというか、まあそんな事はどうでもいいか……いいよ、教えてあげる——だからこよみん、心して聞いていてね?」

「……はい」

「そうそう、先にこれを言っておかなくちゃいけないね。この箱物語は物語シリーズの二次創作です。二次創作なので、向こうの世界——こよみんと楽しい仲間たちが繰り広げるドタバタハートフルコメディ恋愛ハーレム小説の本家とは何の関係もありません」

「ってそれー番最初に書いておかなければダメなやつじゃ」

「いいんだよこよみん、ここは二次創作だ。世界軸の設定をつけておこなう君達が傾物語で世界線移動を使ったじゃない?ここはそのルートはどこかなんだよ。原作のルートAでもなく、キスショットアレロラオリオンハートアンダーブレードに世界を亡ぼされたルートXでもない。ましてや幼い頃に出遭ってしまった伝説の変態がトラウマでこよみんを殺してしまった翼ちゃんがいるルートYでもない。強いて言うならばルートCといったところかな?」

「ちよつと待ってください。ルートYってなんなんですか?もう臥煙さんの呪いとかどうでもいいのでそっちを語ってくださいよ」

「傷つくな——こよみん——ひよつとして、こよみんは幼女趣味だけじゃなく年上のお姉さんさんを傷つける趣味も持つてるのかな?」

「グググ……」

「まあこよみんがどんな趣味を持つとうがそれはこよみんの自由というものなんだけれども——くれぐれもこよみん、警察のお世話にならないようにね」

「それは——ええ、分かっていますよ」

「じゃあ脱線した車両を元に戻そうか。私の呪いについて——だったね。そうだねーこの呪いを出来の悪いお姉さん泣かせのこよみんが理解できるように説明するにはどこから語ったものか…… そうだこよみん、メメや泥舟、余弦、正弦の呪いについてはどこまで知っているのかな？」

「忍野と貝木は上半身になんらかの呪い、影縫さんと手折は地面が歩けなくなる、という呪いってことは聞きました。たしか——斧乃木ちゃんを造るときに担当した部位、だとか」

「そうだねこよみん。だいたいあってるよ——それぞれがそれぞれ担当した部位に呪いを受けたんだよねー。ちなみにメメは寒さを感じない呪いに、泥舟は暑さを感じない呪いのかかっているよ」

「だから、忍野はどこに行ってもあんな格好を」

「逆に泥舟は戦場ヶ原ちゃんに呼び出されて沖繩に行った時もスーツだのタキシードだの暑苦しい格好のままにしようとしたってわけだね」

「ひたぎがですか!？」

「口が滑った——再び本線に戻ろうか。私の呪いに関してだったね——簡潔に言おう、私に呪いはあんまりかかっていないよ」

「え？」

「なぜかって顔をしているねこよみん、そんなに私が呪いにかかっている理由を知りたいのかい？」

「え、ええ——好奇心からですけどね」

「好奇心か、いいね。私の呪いに関してはさして問題もないから教えてあげるけれど、でもこよみん、誰からも言われておるだろうけれど好奇心だけでもを知ろうとしちゃいけないよ？」

「……分かっていきます」

「まあまあそんなに肩を気張らなくてもいいから楽しんで聞いてね。それとこよみんも薄々私かどの部位を担当したのか、分かっていると思うけれど先ずはそれを言っておこう。私が担当した部位は頭だ……… 実際のところはさ——知ってたんだよねー。余接を——人造怪異を造るところで何かしらの代償を払わなければならなくなることは。いや、もちろん私だけじゃないよ？これは皆知っていた事実さ。だから私は呪いを受ける身代わりを作った。古臭いかもしいけれど確実な身代わり、藁で作った藁人形さ。こよみんも聞いたことくらいだろう？藁人形の仕組み自体は少しややこしいから省くとしても、なんとなくは知っているだろう？憎い人の髪の毛を藁人形に入れて呪うという呪いの方法をさ。私はいわば、その逆をやったんだよ。本体から藁人形の方へ呪いを逃す。悪く言えば押し付ける。というのかな？まあ結局のところ、少し失敗してしまっただけで担当した部位、頭に呪いを受けてしまったのさ。頭が良くなるという呪いをね。今考えるだけでも恐ろしいよ。もし、呪いに対して何の対策も打たずにやっていたのだとしたら。少し失敗した程度でなんでも知っていないお姉さんになってしまいうわけだ。対策をしていなかったら、していなかったら——きつと五億年ボタンのようになってたかもね」

「……」

「どうしたの？こよみん」

「臥煙さん、酔ってますか？」

「正解」

曆忍斧。刃物がいつぱいだな。

「おいお前様。起きておるか?」

「おう忍か、どうした?」

「いや、これと言った用はないのじやが——いやなに、隠す必要もなからう。儂の実際の年齢とは思えん発言かもしれんが見た目に引っ張れていると思ってくれ、だから正直に言うぞ——影の中が寂しくなったのじや。お前様と仲良く話がしたい」

「……」

「お前様?」

「うう……」

「な!なんで泣いておるのじや!」

「忍が、忍がデレた!」

「な!なんじやお前様!儂はそんなにデレたことがなかったか!!ええい鬱陶しい!抱きつくでない!儂は抱き枕じゃないわ!」

「いや、でもどうして急にデレたりしたんだ?日頃からあんなにツンツンしていたのに」

「そうじゃったか?覚えておらんわ」

「それはもう、あの学習塾跡に居た頃の様にだんまりだったんだぞ」

「むう、そうじゃったか?実はここ最近の記憶がおぼろけでの、覚えていることといえば影の中でモンスターをハントしていたことと腹が減っていることくらいじゃわい」

「腹が減って——つて忍、ここ最近食事はいつしたのか覚えているか?」

「それはちゃんと覚えておるぞ。3日前にミスタードーナツのボン・デ・リング系を全部食べ終えたところじや」

「いや、そつちじゃなくて——吸血鬼としての方の食事、吸血行動だよ」

「ふむ、そう言われると覚えておらんな。そうかそういうことか。つまり、吸血鬼として存在しているにも関わらず吸血鬼らしくらぬ生活をしておったが為に、記憶がおぼろけになっておった——ということ

か。なるほどなるほど」

「……」

「どうしたのじゃお前様？」

「たぶんこれでしばらく出番はないと思うけれどこれでいいのか？」

「かわまんかまわん——こんなところにおるより儂は我らが団の専属ハンターとして別の物語を進めなくちゃなんので。なにをしておる。ほれ、さっさと首を差し出さんか——儂が死んでもいいのか？」

我が主人様よ」

「じー」

「……」

「じー」

「……」

「おい、そこのお前」

「お前とはなんだな斧乃木ちゃん」

「違う、お前じゃない。お前と言ったのは画面の向こう側にいるお前のこと。おいお前、さつきからなにジロジロ見てやがんだ。見世物じゃねえんだぞコラ」

「お、斧乃木ちゃん？」

「なんだコラ。文句あんのかコラ。なんか言ったらどうなんだよこのタコスケ」

「臥煙さん臥煙さんコイツダメです！こつちガン無視して画面の向こうのお友達にケンカ売っています。ってええ、無理ですってどうやってこの状況を正すんですか。いやいや、何を言って」

「ごちやごちやごちやごちや一人でワケのわからねえこと言ってるじゃねえぞ阿良々木。」

お前が急に『臥煙さん』なんて言いだしやがるから僕がお姉ちゃんにお仕置きされてしまうと思ったじゃないか。そんなに僕の薄い本が欲しいのならばコミケにでも行ったらどうなんだい？まあ僕の薄い本なんて買って読んでたら心のない人形でも心が芽生えてきつと本当に心の奥底から鬼のお兄ちゃんを軽蔑するだろうけれどね」

「きよ、今日はどうしたんだい？斧乃木ちゃん——えーとほら、いつも

のようにアレ言つてよ。僕はキメ顔で」

「だまれ。だいぶ前に鬼いちゃんにも言ったと思うのだけれどアレは僕の黒歴史だ。それを今更掘り返そうだなんて——例え無害認定されてしかもお姉ちゃんのお気に入りでもある鬼いちゃんが目の前に居たとしても。誤つて『例外の方が多い規則』^{アンミリテッドルールブック}が暴発してしまうよ。だから鬼のお兄ちゃん——いや、阿良々木暦。それ以上このことに関して今後一切僕がネタとして受け入れるまでは口を開いてはいけないよ。わかった？」

「お、おうわかった」

「そ、じゃあ僕は仕事があるから。また今度だね鬼のお兄ちゃん。今回僕と忍お姉ちゃんが自由にかき回しまくってしまったから僕たちは今後登場できるのか怪しいけれど」

「お、おう——……………斧乃木ちゃん、またキャラ変わってないか？」

宵曆戦。正月なので神社にでも行くか？

「あ！とろろ木さんじゃないですか」

「たしかに僕はとろとした様なオーラを放っているかもしれないが、しかし八九寺——人を名前をヤマイモもすり潰した食べ物ように呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ」

「かみまみた！」

「わざとじゃない！」

「神とみた」

「お前が神だ！」

「今のは少し微妙な感じでしたね、阿良々木さん」

「ああ、今これ考えた作者も僕のこのセリフを書きながら『微妙だあ』と思っっているそうだぞ」

「あの、阿良々木さん」

「ん、どうしたんだ八九寺」

「前々回はともかく、前回と同じで少しメタい会話が目立ちませんか？」

「ああそれなら僕も気づいていたさ。しかし八九寺——僕らの世界は原作のルートAじゃなくて数ある物語シリーズのうちのルートCだからな。そういう設定があるからこそ、原作ではできない、二次創作独自のネタができるんじゃないのか？」

「そうですね——いえ、私のこの世界の神という立場から見ると第4の壁を破るのはあまり好ましいことではないのですよ。しかし、まあ二次創作ですしね。そうですね、阿良々木さんの言う通り、『くらやみ』さんも出ませんしこの世界に受け入れられる——市民権を得られている概念というかそういう設定ですものね」

「くらやみ……」

「そう考えてみると、ここの作者さんですとかつて『くらやみ』を演じていた忍野扇さんの如く、新キャラとして『くらやみ』さんとか登場

させそうですね」

「やめろ八九寺、あの『くらやみ』が意思をもつことなんてありえない。というかあつてはならない」

「そうですね——裁く立場の者が己の感情で殺人者を無罪にしては困りますからね。もし意思を持った『くらやみ』さんが存在するとしても別の『くらやみ』が消してしまうでしょうし、たしかにありえない話ですよね」

「ああそうだ。あんなのに追いかけるのは2度とごめんだし、それが意思を持って追いかけてくるなんて想像するだけでりちびっちまうぜ」

「時に阿良々木さん。戦場ヶ原さんとはいつご結婚をなさるのですか？この八九神はいつでも歓迎しますよと言ったことはありますがいつまでも待たせすぎですよ」

「そのことに関してはな八九寺——ひたぎの腹が小さくなってからになるかもしれないんだ」

「お腹が小さくって……まさか！」

「ああそうだ、ひたぎも女の子だったらしい。最近仕事が安定してきて気を抜いたら少し太ったって言っててな。僕は別にそのままでもいいと言ったんだが——なぜか殴られてしまつて」

「阿良々木さん、あなた体裁です」

「体裁？」

「噛みました。最低です。あなたは何年間戦場ヶ原さんとお付き合いをしているのですか？それに乙女心を理解されていないことも問題です。だからいつまで経つても童貞なのですよ」

「う、うるさい！僕が乙女心を理解していないのと童貞なのは関係がないだろー！」

「大アリです。ひよつとして阿良々木さんは戦場ヶ原さんが誘っているにも関わらずそれに気がついていないんじゃないですか？」

「そう……なのかもしれない？」

「疲れたわ。この神社つてここまで階段が長かったかしら？」

「あれ？どうやってここに来たのですか？」

「……」

「残念ですが、この空間は完成していませんのでまだ迷い人を案内するわけにはいかないのですよ。今日のところは帰って貰っていいですかね？」

「あら、そうだったの。それは失礼したわ——ねえあなた、北白蛇神社はどこにあるのか知っているかしら？もし知っているのなら、教えて欲しいわ」

「北白蛇神社はですね——えーと、今登ってきた階段を13段ほど降りてから後ろを振り返ると着きますよ」

「そう、ありがとう……。ところで——あなた、みたところ一人のようだけれどお家の方はどこに？」

「ええつとそれは……。実は言いますと、私はこの神社——白蛇神社の神様なのです」

「神様？……。そう——じゃあ何も心配はいらないわね」

「まあまだ着任してまもない新神ですけれどね」

「そう——神様、一つ伝言をお願いしてもいいかしら？」

「ええいいですよ。お賽銭に色をつけてくれるのならば」

「一匹の重い蟹の神様に『ありがとう』って言うっておいてもらえるかしら？」

「お安い御用です」

「ありがとう」

「……。そういえばどこかで見たような顔でしたが、私が迷わせた方の一人だったりするのかもしれないね——さて、今日のところはこらへんで切り上げてお願いを叶えに行くとしますかね」

「ねえこよこよ」

「ん？どうしたひたぎ」

「母の日、八九寺真宵ちゃんって幽霊の子いたじゃない？」

「ああ八九寺な、あいつがどうかしたのか？」

「あの子、あの後成仏できたのかしら？」

「あいつはあの後は浮遊霊になって今は北白蛇神社で神様やってるぞ」

「……
そう、あの子が」

撫余曆翼？。豪華四人立て。

「NADEKOだYo」

「YOTUGIだZe」

「今回AパートはDJ NADDEKOこと千石撫子と」

「最近作者のお気に入りになりつつある斧乃木余接が」

「お送り「しまーす」「するぜ！」

「わあ私がここに登場するのは初めてだよね。読者さんたち大丈夫かな？私が撫子ってわかるかな？原作とキャラクタ―変わってないかな？それとも撫子を撫子って呼ぶキャラの戻った方がわかりやすいのかな？」

「あ？しよっぱなからゴチャゴチャうるせーな。ここの作者が原作キャラの特徴を掴んでもねえくせに脚本も何も考えずに二次に出すのは今更だろうがよ」

「それはそうだけれど……余接ちゃんはさ、またキャラクタ―が変わったの？」

「ああ、それがさ——前々回だっけ？に好き勝手しまくったせい인데んでは知らねえが変えざるを得なかったんだってよ」

「前々回というと——しれつと真宵ちゃんが両辺に渡って出た回のその前、忍さんと余接ちゃんが第四の壁をぶち破ってヤル気はないわ読者に喧嘩を売るわって好き勝手に暴れまくった回だよね」

「ああそうさ——テーマにしてはよく覚えてんじやねえか」

「あはは、実際は書きながらカンニングしてきたのだけれどね——で、今日のキャラは……キレ撫子？」

「ご名答、へえ今日はどうしたんだよ。お前本当に撫子か？ええ？」

「えへへ、今描いている漫画に典型が舞い降りたからね。ここの作者さんと同じだよ。それに、あの時の冒険も今思い出しながら描いているところなんだ」

「あの時ってえと？」

「中学3年生になった頃の」

「ん？ああドラえもんだらけならぬ撫子だらけになったアレか！悪い

「ことは言わねえやめとけ」

「詳しくは撫物語を読んで欲しいところだけれども——つて、なんで？」

「あ？そりやお前、自分の能力を描いた漫画なんて臥煙さんに読まれて見ろよ——今の仕事、続けられなくなつちまうぜ？」

「そつかあ、じゃあシュレッダーにかけるとするね」

「ああそうすることだな」

「はいはい、今でまーす——今行くから！そんなに呼び鈴を連打するなつて!!」

「あ、阿良々木くん。おっひさー」

「はねかわ？……どうして日本にいるんだ？」

「どうしてだろうねー？阿良々木くんに会いたくなつたから——とかかな？」

「そ、そうか——まあここじゃなんだし上がれよ」

「お邪魔しまーす」

「で、羽川。どうしてここに？」

「それはさつき言ったじゃん。阿良々木くんに会いたくなつたからつて」

「僕が聞いているのはそういうことなんじゃなくて——いやそういうことでもあるんだけど違う、そうじゃない。つまりはえーと何が聞きたいのかつていうと」

「どうやって国境を超えたのかつてこと？」

「つまりそうだ。一体どうやって国境を超えたんだ？」

「ひ・み・つ??……つて言う訳ではないけれど阿良々木くん、それは簡単なことだよ。密航つて知つているでしょ？」

「……今の言葉は聞かなかつたことにするから羽川、この話題は誕生すらしなかつた」

「そうだね、国に仕える阿良々木くんにする話じゃなかつたね。このことはずっと秘密にしておくね」

「で、羽川——どうして日本にいるんだ？」

「実はさ阿良々木くん。この前までウガンダにいて、未だに少年兵を

作っているLR Aの司令官に『他人を傷つけたらダメだよ！他人を傷つけるだけの人生を送っていたら世界中の人にリンチされちゃうよ！みんな君達が民間人を虐殺することに怒ってるよ！今からでも遅くはないから謝って罪を償おう？』って諭したら子供みたいに駄々こねて命狙われちゃってさ——それで唯一手が届きそうにない日本に帰ってきましたー！ちなみにその司令官のいる邸宅は今頃大火事になっていているところだと思います」

「そ、そうか。相も変わらず羽川はすごいことを成し遂げているんだな。まあなんだ、ここにいる時くらいゆつくりしていけよ。これを投稿する頃は2月くらいになりそうだけれどここはまだ正月だからな——そうだ羽川、餅食うか？」

「納豆餅を希望するであります！」

「納豆かあ、あつたかな？」

「あ、そういえば阿良々木くん」

「ん？どうした？」

「ひたぎちゃんとはいつ結婚するのかな？」

「…… あー、うん。結婚、結婚かあ」

「あれ？もしかしてもうしてた？私呼ばれてないだけ？」

「いや、まだしてないのだけれども…… うん。ひたぎとはあまり、そういう話をしていなくて」

「そうなんだ、ふうん」

「いつかやろうっていうのはひたぎとの間にあるのだけれど——なんというか、発破がないというか一歩が踏み出せなくて…… 僕がヘタレなだけかも知れないけれども——そういえば最近のひたぎの行動を思い返してみれば、あれは既成事実を作ろうとしていたからではないのか？ハロウィンだってクリスマスだって、そう捉えて見ればあのおかしな行動は僕を誘っていたのかもしれない。ということは僕がヘタレだったのか——ありがとう羽川って猫!!」

「にゃ？」

「ななななんでお前が！」

「ああ、気を抜くといつもこうにやっちゃうのにや——そうだ伝え忘

れていたが人間、俺は俺でご主人じゃないにや。もつとも、影からの
雰囲気的にちっこいのは気づいていたようだけにや、にやつハハハ
ハハ！」

「…… どういうことだ？お前は今羽川とは別行動できているって
ことなのか？」

「当てずっぽうなら流石刑事なだけはあるにや——だいたいそういう
ことだにや」

「ということとはもしかして、結物語のときも……」

「勘違いするにやよ人間、ここは世界線が違うから可能にやだけにや
から原作の方はどうにやによかは知らないにや」

「そうか、まあせっかくここに来たんだ。猫、他人に迷惑をかけない限
りはゆっくりしていけよ」

「コタツがあるから最初からそのつもりだったにや——ああそれと人
間…… いや、やつぱりなんでもにやいにや」

「ん？そうか——ところで納豆餅食うか？」

「いらにやいにや」

扇暦炎姉妹。パンはパンでも食べられるパンはなん
だ？

「がぼぼぼぼ……ごぼあごぼぼぼ!!——ぷはあ！ハアハアハア
ハア——はあ……」

「危ないところでしたね。阿良々木先輩」

「扇ちゃん？」

「はい、いつもニコニコあなたの周りに這い寄る混沌こと忍野扇です」
「ここは？」

「いやだなあ阿良々木先輩、忘れたんですか？ここは私のお家ですよ。
阿良々木先輩は急に我が家を訪ねてきては反応する間も無くお風呂
に直行したのです。とりあえずタオルを出しておこうかと覗いてみ
ればなんと服も脱がずに湯船に浸かってるではありませんか。おま
けに熟睡していらつしゃいましたし——よほど疲れていたのですね。
可愛かったですよ、寝顔。思わず見惚れてしまつて阿良々木先輩が溺
れるまで見つめ続けてしまいました」

「……」

「思い出しましたか？」

「え？ああ、うん」

「それで阿良々木先輩」

「なんだい扇ちゃん」

「阿良々木先輩はなぜ私のお家に——いえ、私に会いに来たのですか
？ひよつとしてこの紙袋に關係があつたりします？」

「そうだった思い出した。扇ちゃん——Merry Christmas
as!」

「…… あなたは本当に愚か者ですねえ阿良々木先輩、遂には月日ま
で読めなくなつてしまわれましたか。いいですか愚か者、クリスマス
は2ヶ月も前に終わりましたよ。作者がクリスマスにワイキキ島に
行つて銃撃ちまくつて喜んでいたのを忘れましたか？」

「…… そうだった思い出した。扇ちゃん——Merry Chr

i s t m a s !」

「無茶言わないでくださいよ阿良々木先輩。もう二月ですよ？書いている日は節分だっていうのに季節感もへったくれもないじゃないですか」

「最近友人に勧められて物語ぶくぶくを始めたけれどチュートリアルのクリア条件10,000を達成できなくて4度ほどやり直してやつとクリアできたようなポンコツ作者が書いているんだぜ？そんな作者に季節感を出せっていう方が無理があるぜ」

「そうですね。まあ阿良々木先輩からのプレゼントですし。喜んでお受け取りいたしますよ。そうだ、少々お待ちください」

「うん？」

「はい——どうぞタオルです。それとこれ、プレゼントのお返しです。ここに置いておきますよ」

「ありがとう」

「ではごゆるりとおくつろぎください」

後日談——とうか数時間後

「まったく、変わりませんねえ阿良々木先輩は——一体どういった考えを辿れば女子の後輩にデイルドを贈ろうと思うのでしょうか？——いえ、使いませんよ。なにいやらしい想像を働かせているんですかやめてください。じゃないと作者さんに言いつけますからね」

数時間後の暦ザエンドウ

「まったく、扇ちゃんらしいよ。この黒ビキニは額縁に入れて飾っておこう——でもその前にちよつとおいを」

「ねえこよこよ。いえ、暦……阿良々木くん、いったいなにをしているの？」

「火憐じゃないよ！」

「月火じゃないよ！」

「じゃあ誰だ！二人合わせて！帰ってきたファイアーシスターズ！！」

「いやー久しぶりだな月火ちゃん」

「久しぶりだね火憐ちゃん」
「今日はなにをしようか！」
「じゃあ久しぶりに予告編クイズ！」
「くいず〜p〜」
「野原さんといえは係長ですが！」
「ですが〜p〜」
「さてさて主任のである作品はなんだ！」
「あまこあ〜p〜」
「愛しているんだ、君たちを！」
「やるもんじゃないね、キャラじゃないことは」
「あの状態で、動けるハズが」
「これだから面白い、次回予告ってやつは」
「次回！『水と緑と銃声と』」
「ここが、この次回予告が私の魂の場所よ！」
「火憐ちゃん——それはVDだよ」

曆戦斧忍。僕はチョコあまり好きじゃないの。

「ねえこよこよ——今日は何の日だかわかる?」

「今日は2月14日だけれど——あ」

「そう、バレンタインよ——というわけでこよこよ、私はここでバレンタインにちなむ豆知識を披露するわ。バレンタインというのはねこよみん——1940年の2月14日、第二次世界大戦中のことよ。イギリスでとある戦車が採用されたわ。その戦車はニック・バレンタインを筆頭して開発されコードネームは、バレンタイン歩兵戦車になったわ——高校時代よりも賢くなったこよこよならもう予想はつくわよね?ええそうよ——イギリスで採用された戦車というのはバレンタイン歩兵戦車のことよ。そのことから2月14日はバレンタインの日として残り現代では新しい人物や好意を寄せている相手に対して何かをプレゼンメントするという風習になったわ——もっとも例の戦車は確たる戦果を残せてはいないのだけれどね。今年のバレンタインのプレゼンメントはこの豆知識でどうかしら?」

「ふーん……て——いやいやいや!嘘ですよねひたぎさん!」

「なによ。他のプレゼンメントが欲しいっていうの?まったく、こよこよは欲しがりさんね——はいこれ」

「こ!これは!!」

「あげるわ、欲しがりさんめ」

「やったあああ!」

「それとこれも」

「ん?これは?」

「忍野さんに聞いたけれど彼女、甘いものが好きなんだってね」

「ああ忍の——わかった後で渡しておくよ」

「やあ久しぶりじゃないか——といってもあのときはAパートとBパートで別れていて会ってはいなかったのだけれどね。調子はどうだい?元ハートアンダーブレード」

「どうもこよこよも最低な気分じゃわい——ひたぎとかいったかあの娘。我が主人さまが高校時代とちつとも変わっておらん——毒入りとは

いっぱい食わされたわい」

「それじゃああの神経毒はよく効いたようだね——流した甲斐があったよ。大丈夫、心配することないよ元ハートアンダーブレード——鬼のお兄ちゃんは死んではないよ。いや、死んではないだろうけれど艶かしい蛇に巻きつかれた蛙のような気分だろうね——実際は蟹のハサミに捕まった煮干しだったりするのかな？」

「どっちの喻えでもええわい。で、我が主人さまはどこに行ったのじゃ？」

「守秘義務がありそうだから多くは言えないのだけれどあの娘からの依頼でね——大人のホテルだそうだよ？僕も場所は知らないけれど」「ホテル？泊まるのならはこの家でもいいだろうに——何か他に理由が……なるほどそういうことか」

「僕にも分かったよ元ハートアンダーブレード。鬼のお兄ちゃんはずい大人の階段を登るんだね。こういう時に友達としてどういう顔をすればいいのかよく分からないけれど——後は若い者たちの好きにさせようよ鬼のお姉ちゃん」

「そうじゃな——つてお姉ちゃん言うな」

「お子さんはバンパイアクラブかな？」

「気が早いわ！」

「忍お婆ちゃん」

「うっさいわ！」

「でも正直どうなの？もし、仮にもし本当にそうなっちゃった場合——鬼のお姉ちゃんはこういう立場に——どういう役割になつてしまふんだらうね？」

「そんなこと考えるだけ無駄じゃ。今までも時の成り行きに任せてきたし——これからもそうしていくつもりじゃわい」

「そう。ちやうど戻ってきたようだから——僕はもう行くね。鬼のお兄ちゃんによろしく言っておいて」

「なあ忍」

「どうしたのじゃ我が主人さまよ」

「見た目幼女に相談しても大丈夫かどうかはわからないけれど——い

や、きつとアウトなのだろうけれど」

「なんじや？早よう言わんか」

「その——ひたぎとの初めてが上手くいかなくてさ」

刀扇忍曆。少し雰囲気を変えてみたよ？

「吾輩は刀である。銘はまだ無い。どこで打たれたのかとんと見当がつかぬ。気がつけば我輩は暗くシンとした場所で経をあげられていたのだ。吾輩は二振りの刀である。一振りは細くとても繊細で美しい物干し竿でありもう一振りは直刃の太刀である。奇しくもそれは吾輩が遠き昔に振るった刀——怪異のみを殺す妖刀『心渡』と怪異を活かす妖刀『夢渡』によく似ている。——そうだお気づきのように吾輩は元死屍累生死郎である。元人間で元吸血鬼で元鎧で現在は臥煙伊豆湖が所有する日本刀。名乗って大丈夫なのかはわからないから元をつけて元死屍累生死郎。吾輩は刀である。銘はまだ無い」

「いつもニコニコ！あなたの周りに這い寄る混沌！忍野扇！です☆……この紋所が目に入らぬかつ！こちらにおわす方をどなたと心得る！恐れ多くも先の副将軍！阿良々木曆公にあらせられるぞ！……これでは阿良々木先輩のご紹介になつてしまいますね——もつと他の決めゼリフがありますか。この扇さんの闇吹雪。散らせるもんなら散らしてみろい！……俺のこの手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！……私はこんなに熱血なキャラではありませんしねえ——作者の趣味では登場シーンの決め台詞を叫ぶ幅に限界があります。さてどうしましょうかと言ったらこうしましょうか——私達のヒトリゴトは、ヒトリモノガタリ独物語はここでおしまいです。ではまた今度」

「おいお前さま！儂はドーナツが食べたいぞ！ミスタードーナツへ連れて行けい！」

「おいおい待てよ忍。ミスタードーナツなら先週にも行っただろう？だからもう暫くは行かないよ」

「そんな！後生じゃからお前さま——我が主人さまよ！儂をミスタードーナツに連れて行ってたもれ！」

「ならば僕を萌えさせてみる！」

「にーに、しのぶどーなちゆたべたい！」

「……」

「今日は何にしようかの！おお！コレは先日のポスターにあつたポン・デ・リング プレーンではないか！そしてなんと！こっちはダブルシヨコラではないか！迷うのお…… いったいどれにしようか——よし決めた！おい店員さまよ、ここから——ここまでを全部頼むぞ！」

「頼まねえよ——いったい僕にいくら使わせる気なんだ。お前の分とひたぎの分、そして僕の分を3つずつだ！合計9個までだ！」

「そんな！儂にこの宝石達のなかから無慈悲にも3つだけを選別しろというのか！そんなのは嫌じゃ！儂は——儂は此処に並ぶ全てのドーナツを食すと決めたのじゃ！」

「お前のドーナツへの愛にはただただ帽子を脱ぐことしかないが忍——考えてもみろ。別に今すぐにも食べなくてもこの先もちよくちよくここに来るんだ。その時にまた別のものを食べればいいだろう？」

「むむ——それもそうじゃな！では店員さまよ！儂にはポン・デ・リング プレーンとポン・デ・ヨロイツカ・キャラメルシヨコラとゴールデンチョコレートを頼むぞ！お前様は何にするのじゃ？儂はこのクリプスシヨコラ ダブルチョコがいいとおもうのじゃが」

「それはお前が食べたいだけだろ——これとこれとこれを店内で。であとポン・デ・ストロベリーとこのいちごのカスタード」

「ストロベリーカスタードフレンチ」

「…… とストロベリーリングを持ち帰り用でお願いします」

「儂も店内で食すぞ！」

「なにこれマジありえなくない？砂糖という鎧やチョコというドレスで着飾っていないポンデリング本来の、まるで赤子の頬のようなモチモチ感が際立ち口の中ではマシユマロを食べているかのような程よく口当たりも良い硬度！クリームという武器も一切がないから本当にプレーンな味わいで噛めば噛むほどに普段の甘さという美しいドレスで着飾っていないポン・デ・リング本来の高貴で質素な味！バスケットに入っている時には煌びやかな周囲から地味なもので浮いていてまるで舞踏会にいるメイドのような雰囲気を放っていたがそれ

は違った！このメイドこそが国の王妃、人は見た目で判断できないというがその言葉をそっくりそのまま表したかのようじゃ！これは甘いものが好きではない人でもあつと言う間に食べ終えてしまうじやろうな！マジぱはないの！」

宵斧曆。雛祭りネタとか書いていたけれど一ヶ月以上経ったから消しちやっただ。

「お？よお八九寺」

「なんですか？ドアラ木さん」

「人の名前を中日ドラゴンズのマスコットキャラクターみたいで名前前で呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼かみました」

「違う、わざとだ」

「現在濃霧で試合は中止されています」

「なんでや阪神関係ないやろ！」

「あれ？そういえばどこどこが戦ったんですっけ？」

「そこ覚えていないのかよ！……千葉マリーンズと阪神タイガースだよ」

「よく覚えていましたね——はっはーさては阿良々木さん、阪神ファンですね！」

「ちげーよ、僕がスポーツに興味がないことくらいわかるだろ？たまたまだよたまたま、お父さんが観ていたんだ」

「へーお父様がですかそうですか——話は変わりますが阿良々木さん。アニメ終物語の終盤、くらやみが扇さんを飲み込もうとした時に阿良々木さんは扇さんにダイブしたじゃないですか？」

「ん？ああそうだな」

「そこでふと疑問に思ったのですが、阿良々木さんは抱きつく瞬間右腕を扇さんの後ろに回していましたよね？そして覆いかぶさる形で倒れていましたよね？その状態からどうやって右腕を持っていかれたのですか？」

「重箱の隅をつつくな！あれについては倒れながら一回転して腕が持っていかれたってことで片付いたじゃないか」

「いえ、それは作者と知人でのリアルの方の話じゃないですか。こちらでは今まさに提起されたので解決も何もありませんよ」

「ブルブルブルブルアイ!!(???)?アイ!!(???)?ブル・ベ・リ・アイ!!(???)?ブルブルブルブルアイ!!(???)?アイ!!(???)?ブル・ベ・リ・アイ!!(???)?」

「お、斧乃木ちゃん?」

「どうしたんだい?鬼のお兄ちゃん」

「いや、どうしたんだいはこっちのセリフなんだけれど」

「今のかい?表情筋のウォーミングアップだよ。ほら、僕って死体人形じゃないか——ずっと喋らないままだと死後硬直って言うんだっけ?それで顔が固まっちゃうんだよね」

「なるほど——キョンシーみたいなものか」

「そうだね、種族や属性は全くと違っていいほど違うのだけれど——まあ同じ死体人形同士、共通点は案外多いのかもれないね。関節が固まることしかり、表情が固まることしかり。そういえば、キョンシーは関節が動かない——なんて言われているけれども、じゃあいったいどうして跳ねたり人を噛んだりすることができるのだろうか?」

「ん?そりゃあ——こう、足首で地面を蹴るようにさ」

「でも鬼いちゃん、足首も関節だよ?」

「じゃあ神通力でも使っているじゃないのか?ほら、長い年月を経たキョンシーは神通力を使える——っていうじゃん?」

「なるほど、結構いい線いっているかもね。僕もその長い年月を経れば神通力を使えるようになったりするのかな?具体的にはあと50年くらい?」

「……」

「どうしたの?まさか僕が神通力を使ってどこぞの四国の魔法少女のように空を飛ぶ姿でも想像した?」

「魔法少女斧乃木余接か、アリなんじゃないか?」

「ラストの方では鬼いちゃんが魔法少女になつて僕を生き返らせるよ」

「作者や一部のマニアしか喜ばないようなことを言うのをやめろ」

「でもそういう奴もいるよね。ிட்டだったかはハッキリと覚えていなければ魔法少女っぽい服を着て杖で胸をド突くという限りなく雑

な心肺蘇生法を下着姿の女の子にしていた男の子を僕は直江津高校で見たことがあるよ」

「あ！阿良々木さんじゃないですか！」

「人を西尾維新氏作の物語シリーズの主人公みたいの名前で呼ぶな。僕の名前は——ってあつてるじゃねえか」

「1話の中でそう何回も噛みませんって」

「珍しいじゃないか、勤務中にお前の方から話しかけてくるなんて」

「勤務中に小学生女兒と遊ぶ警察官の方が異常だと私は思いますけれどね」

「それはほら、地域密着型の警察官だからさ」

「そうですか。さつき用水路にですね『ポイ捨て禁止』という看板がポイ捨てされていました——私は一部始終を見ていたのですけれど近所の小学生のタチの悪いイタズラです。私は神様なので用水路から脱出する梯子や階段が神隠しというバチを当てておきました。がきつと再発するので警察側から注意しておいて貰えますか？」

「了解——どこら辺なんだ？」

「浪白公園の近くの団地があるじゃないですか？あそこの裏手にある水の少ない用水路ですよ——あと犯人はたぶんまだ上に上がれていないと思うので見に行ってみてください」

「そうか、それじゃあ今から行つて見てくるとするよ」

「ええ、では私も町の霊的平和を守るため、パトロール——もといお散歩を再開することにしますね。では」

戦曆忍貝。知らなかったのかい？肉は野菜と食べる
と美味しいんだよ？

『突然だけれどこよみ——私はあなたとの恋人関係をやめたいと思っ
ているわ』

『ええええええええええええええええええええええ!!なんでんなんで
!』

『ギガンみたいな顔で迫って来ないで——画面がうるさいわ』

『またまた、嘘ですよね!ひたぎさん!』

『ところがぎつちよん、それが嘘でもないのよ』

『理由を聞かせていただいてもよろしいでしょうか?』

『急かさなくてよ、童貞が感染するわ。それに急かさなくてもちやんと
説明はするつもりよ——けれどその前に1つ質問。私たち、付き合い
始めてから何年になると思う?』

『高校3年生の化物語から一応この箱物語の設定上1番近くに位置す
る結物語だとリアルな方では2006年から2017年だから11
年、物語の設定上だと17歳から23歳だから6年——ですね』

『この際簡単な計算にもかかわらず計算機を使って引き算をしていた
作者は置いておいて——6年よ?6年も付き合って——交際してい
て私は未だに処女だしこよみは未だに童貞じゃない、しかもあまり手
も繋いだこともないウブさなのよ?これって付き合いっていると見え
るのかしら?それに元陸上部で外資系でバリバリ働いていて引き締
まったボディを思った女の子がYES枕を持って待機しているにも
関わらず襲おうともしないチキンな男がいるなんておかしいと思わ
ない?』

『それは——悪かったよ僕がチキンでヘタレな男で』

『だからこよみ——いつそこと恋人なんてやめて結婚してしまいま
しょう』

『へ?あ、あれ?やめるってそういう』

『私がこよみと別れるわけじゃないじゃない、もし別れると思っていたな

「ら殺すわよ」

『え、でも』

『でももへちまもないわ。私が結婚するって言ったのよ、結婚するわよ——もう婚約指輪と婚姻届けも持ってきたわ。後は派手な式場を用意しましょう』

『でもお金とか』

『外資系は今とっても儲かっているのよ、ここでパーっと使ってもあと20年は派手に遊んで暮らせるだけの余裕はあるわ』

『そうすか』

『あーあ、せっかくこんなカッコいい男の子とお付き合いさせていただけているというのに——乙女の夢である「男の子からの告発」がないとはね。本当に私の彼氏にはガツカリするわ』

『おい！お前様よ！いい加減に起きるか！今日はあのツンデレ娘とデートに行く日じゃろ？』

「ハッ！夢か！」

「遅かったわね、こよみ」

「……」

「黙ったままじゃ何も伝わらないわよ？遅れた言い訳でも考えているのかしら？」

「なあひたぎ」

「いいわ、言い訳なんて聞きたくないわ」

「僕は必ず婚約指輪を買って君にプレゼントする。だから——だから、もうすこし待っていてくれないか。ください」

「……いつまで、いつまで待てばいいの？」

「それは、まだ分からないけれど——30になるまでには」

「そう——じゃあ待っているわこよみ。大好きよ」

「ああ僕もさ」

「せっかく買った指輪が無駄になってしまったわ——私のファンに売ったら買値の倍になったりしないかしら？」

「ちよつとそこのアロハのお兄さん、お話聞いてもいいかな？」

「やあ阿良々木くん、久しぶりだねえ」

「おう、忍野だったのか」

「違うよ、僕は通りすがりの只野さ」

「……この町から出た後も元気にしていたか？」

「はは、元気だよ。おかげさまでね」

「もしかして仕事で忙しかったりしたか？邪魔したな」

「いや、今回の仕事は今さつき終わったところさ」

「そうか、じゃあな忍野。時間取らせて悪かったな」

「いやいやあそうでもないよ？阿良々木くんに伝言を頼まれていたからね——ええ、オホン、『阿良々木先輩。例のアレの欠片を見つけてしまった——本当ならば私が直接手渡したい所ではあるが、あいにく私は仕事があり直接会うことができない。おじさんに頼んでしまつて申し訳ないのだが、西直江津のロッカー番号1327に保管してもらふことにした。忍ちゃんに合うような服も同封しておいたので是非受け取ってほしい』……それでロッカーの鍵は公務中だろうしてことで家のポストに入れておいたから、それとロッカーの代金はすでに払ってあるらしいよ？」

「そうか、ありがとう。じゃあまたな」

「ああそうだ阿良々木くん、これあげるよ。はいこれ、バナナの皮——阿良々木くんたちの恋のキューピット」

「いらねえよ！」

「阿良々木くんはいつも元気がいいなあ、何かいいことでもあったのかい？」

「忍野、飯食いに行くぞ」

「お、いいねえ。何を食べに行くんだい？」

「肉だ、肉が食いたい——焼肉屋に行くぞ」

「よし！じゃあ影縫ちゃん呼んでくるよ」

「影縫は肉をよく焼かずに食うから呼ばなくていい」

「手折君呼ぼうか」

「アイツは連絡がつくのか？」

「つくんじやないかな？」

『寿司食ってる、邪魔をするな』

「じゃあ臥煙先輩を」

「臥煙先輩は出席しなければならぬ講義があるそうだが、これないと
言っていた」

「じゃあ僕たちだけ？」

「ああ」

「そっか、じゃあパーっとやろうか！」

「そうだパーっとやるぞ——考査の悩み事なぞ些細なことだからな
「はは………」」

忍貝曆戦。今更だけれど前回の最後と今回の最初は過去編的なものだよ。

「何度言ったらわかるんだ忍野？焼肉屋で野菜を焼くな食うなそもそも店員に注文するんじゃない」

「でも貝木くん——肉はシャキシャキな野菜と一緒に食べるとすごく美味しんだよ？あ、白米大と韓国海苔と温玉お願いしまーす！」

「お前は物凄い間違いを犯している、それになぜ気づかない？その肉はまだひっくり返すな、その肉はまだ焼けていない」

「つつてもねえ貝木くん——貝木くんだって刻みネギ付けたりして食べているじゃん？それに僕は少しレアな方が好きなんだ。肉が柔らかいからね」

「それとこれとは全く存在が別だろう。タレの野菜は肉という主人公を立てる脇役であって野菜そのものは肉から主人公の座を奪い取る悪役だ。あと豚肉と鶏肉をレアで食べようとするんじゃない、病気になるっても知らんぞ——レアで食べたいなら牛肉を注文しろ」

「そうかな？僕の口の中じゃ肉と野菜は同じように咀嚼されて胃の中に入っていくんだけれどなあ——店員さーん！ハラミ3人前もお願いしまーす！でも牛肉はさあ、味が違うんだよね。焼肉に求める味って言うのかな？そういう味がさ」

「ならばなぜ焼肉屋に来た——寮でホットプレート使ってやっていればいいものを」

「貝木くんが誘ったからさ」

「…… そうだったな」

「失礼しまーす、白米大と海苔、温玉とハラミです」

「ありがとう、じゃハラミ焼くよ？」

「隙間があくまで待て」

「これ焼けてる？」

「いつも通り焼けている肉は温度の低い端の方だ」

「貝木くんと焼肉に来ると楽で頼もしいよ」

「Believe!人は悲しみ重ねて大人になる。いま、寂しさに震えている愛しい人の——その哀しみを胸に……」

「そんな、こよみが98点なんて…… 信じられないわ」

「悪かったなお前より点数が高くって」

「いえ、これはある意味しかたのないことかもしれないわ——だってこれ以外に私に勝てることなんてないんですもの」

「おいそれどう言う意味だ!」

「そのままの意味よ、深く考えなくてもいいわ——歌唱力では私が負けているかもしれないけれど総合的に考えれば私が勝っているわ。ファンの多さも私の勝ちよ。でも安心して、私の1番はこよみだから」

「うぐ、ぬ」

「というわけで歌うわ——staple stable」

「自分の曲で勝ちに来てんじやねえか!」

「今ならまだ間に合うから、撤退した方がいいよ……」

「ウソよ、こんな——こんなことがあってはいけないわ。自分の曲で97点だなんて……」

「……」

「さてはこよみ、何かいじったわね?」

「そんなわけあるか!これは正真正銘お前の歌唱力の点数だ!てかなんでそんなに点数にこだわるんだ?僕はひたぎの歌声好きなんだけれど」

「…… そうね、やっぱり点数なんてどうでもいいわよね。所詮人の感情も理解できないような機械の出す点数なんてアテにはならないわ——次はこよみの番よ」

「おう」

「さてこよみは何を歌ってくれるのかしら?」

「お前を嫁にもらう前に 言っておきたい……」

「0点、宣言失脚よ」

「なんでだ!」

「こよみが私に逆らおうなんて100年早いわ——お義母さんの子宮、いえ私の子宮からやり直したらどうかしら?」

「それだとお前が僕の母親になるだろうが!」

「いいじゃない! 私がこよみの母親……ねえこよみ、試しに私のことを『ママ』って呼んでくれないかしら? 『お母さん』でもかまわないわ」

「お前、怖いぞ」

「あら? いいじゃないの別に——キャラ崩壊してツンデレがヤンデレになったところで二次創作だから許されるのよ」

暦戦専門家。作者の頭にニキビみたいなのできたんだけれど？

「は！」

「起きた？阿良々木くん」

「ひ、ひたぎ？」

「私読んだわ、少年マガジンの羽川さんとの本屋でのシーン——阿良々木くん、羽川さんにあんなことさせてたのね」

「ひたぎさん!？」

「先週の神原は阿良々木くんに無断で胸を押し付けていたのは阿良々木くんが悪いわけではないから心配しないでいいわ。でも、今週と来週と再来週は別よ。羽川さまにキスをしなかったこと、阿良々木くんの彼女としては褒めてあげなくもないけれど羽川親衛隊としては万死に値するわ。電話中に神原のお尻に欲情したこと、自分の後輩をそんな目で見るなんて見下げたわ阿良々木くん」

「ち、違うんだ！」

「違う？何が違うのか教えてちょうだい？全く、羨ましい——じゃなくて最低よ阿良々木くん」

「う…………と、とりあえずこれ、取ってくれないか？」

「いやよ、なんで浮気男の手鎖を取らなくちゃいけないのよ」

「ほら、僕一応警官だしこれから公務もあるから——ね？」

「そんな阿良々木くんにご報告、さっき届いたメールを読むわ」

『件名:こよみんとひたぎちゃんへ』こよみん、過去の事とはいえあんなことを公衆の面前で臆面もなく実行させる人間が警官になつているなんてなんでも知ってるお姉さんでもドン引きでとても信じられないよ。今日は暇を出してあげるから、彼女さんとじっくり話し合ってね。　愛しの臥煙伊豆子より??』

「…………ねえ阿良々木くん——臥煙伊豆子って、誰なのかしら？」

『来週のプリキュアは！作画スタッフがストしたから別の番組になる

Z E！今から呼ぶZ E！みんなが観るZ E！四の五の言わずに観て
いけY O！』

『来週くるスペシャルな者達は!!』『笑顔がプリティ！バランスをとる
達人！地獄からの使者！弥次郎兵衛忍野!』『この世の全ては金で解
決！金さへ払えば何なりと！ウィークポイントはある女の子！地
獄から来た男！マネーイズゴッド貝木!』『不死も不死も等しくデ
ストロイ！この世にあるのは2つのみ！ウチに殴れるものと殴れな
いものや！全てを無に帰す破壊の化身！鉄十字キラ！デストロイ
ヤー影縫』『トガツた者たち全てを束ねる大黒柱！超大国の裏の支配
者!？モンスター退治の専門家！他の三倍速い緑の彗星！オルガナイ
ザー臥煙!』『命が惜しけりやそこをどけ!!』『俺たち!』『ウチら
!』『我ら!』『妖怪変化のプロ集団！その名も「オカルト研究会」
!』『ぜつたい見てくれよな!』

「誰がみるんだよ……」

「阿良々木くんはいつもつれないなあ」

「せやで阿良々木、ウチらも頑張ったんやぞ」

「まあそんなつれないこよみんなもお姉さん、嫌いじゃないのだけれど
ね」

「どこから入ったんですか」

「僕たちをゴキブリみたいに言わないで欲しいな——心配しなくても
僕と臥煙先輩はちゃんと玄関から這入ったよ」

阿忍羽戦八。リアルにもう11月近いのに蚊が飛んでる。

「お前さま、少し頼みがあるのじゃが」

「ん？どうした忍？」

「PLAY STATION 3を買ってくれんか」

「なんでそんな物を…… DSはどうした？飽きたのか？」

「DSは飽きた。どうぶつの森もマリオもリズム天国もレイトン教授もやり尽くした」

「やり込み要素はやったのか？」

「借金は全額返済して狸の店も自宅も最大レベルにまで上げた。スターコインも全てとった、赤旗も全てとった。なんならセーブデータ3つ分全てそうじゃし、マリオに関していえばTAS動画をとても良いくらいじゃ。それにリズムゲームは全てハイレベル、パーフェクトキャンペーンもミスなくクリアできるレベルじゃ——だから我が主様よ。PS3を買ってくれんか？」

「はあ、分かったよ。でも新品は売ってないからな、中古になるぞ」

「それでいい！カセットは好きに選んでくれてかまわん——ではまたの我が主様よ」

「羽川と話せる!!それだけで今日貝木と話すことも苦にならない！」

「あはは、私と会話するだけで敵である貝木さんとのお話も苦にならないって、もしかして阿良々木くんってそれだけ私のことが好きなのかな？」

「大好きだ！」

「初恋の人に振られたけれど初恋の人に別の意味であっても大好きって言われるのって結構嬉しいものなのね」

「ん？人に好意を示されることは嬉しいことだぞ？っていうか、羽川にも知らないことがあったのか!？」

「言ってるでしょ？『なんでも知らない、知っていることだけ』って。」

なんでも知っているお姉さんと違って私にも知らないことはいっぱいあるよ——まあ、それを本当に知ったのは世界に飛び出た時だけだね」

「本当に羽川にも知らないことがいっぱいあったんだな」

「うん、今も知らないことはあるよ？恋、とか」

「……」

「警察官になっても変態さんな阿良々木くんをどうやって更生させるのか。とかね」

「あら、こよみ。奇遇ね」

「ひたぎ、奇遇だな」

「今は何をしているの？パトロール？」

「ああパトロールの真っ最中」

「そう……ところで今夜、家のホットプレートを使って焼肉をしようと思うのだけれど——勤務が終わったら来るわよね？」

「焼肉か、いいね」

「待ってるわ——もちろんお父さんも」

「あ、小林さん」

「もしかしてもしかしなくても八九寺、それは僕のことを呼んでいるのか？」

「そんなわけないじゃないですか小林さん」

「この会話も年数が経って若干白けつつもあるが八九寺、僕の名前は阿良々木だ」

「失礼噛みました」

「違う、わざとだ」

「冷めました」

「この会話か！この流れに飽きが来たのか！」

「まさに飽き飽きさんという訳ですね」

「お前！過去の埃かぶったネタを引っ張り出して上手いこと言った風にするな！本当に飽きているみたいになるだろ！」

「いえ、実際のところ読者の皆さん達はどう思っているでしょうか？この一連の流れもそろそろ飽きてきた頃合いではないでしょうか？」
「そうは言ってもだんだん八九寺、コレは僕とお前の伝統芸能みたいなものじゃないか。それをそう簡単に無くしちゃっても困るだろう？」
「たしかに、そうですね。では、ここは原作者様である西尾維新氏が私たちの新たなネタを扇物語で披露してくれることを神にでも祈っておきましょうよ」
「ここぞとばかりに自分に祈らせようとするな。神をそんな安売りするんじゃない」
「神を相手にお前呼ばわりする第一信者もどうかと思いますか」

神千羽炎姉妹。扇ちゃんのヒロイン本がないのはどうかと思うよ？

「阿良々木先輩！」

「あん？どうした？神原」

「阿良々木先輩はエピソードという人物をご存知だろうか？もし良ければ紹介してほしい！いや、紹介してくれなくても一目拝ませさせてほしい！」

「ん、ああ、ええと、なんで？いや、どうして僕がそのエピソードっていう吸血鬼を知っていると思ったんだ？」

「エピソードさんは吸血鬼だそうだ。吸血鬼モドキな阿良々木先輩ならば吸血鬼ネットワーク的なものでエピソードさんをご存知であると思ってな！いや待て！現に、阿良々木先輩は私の話を聞く前にエピソードさんが吸血鬼と当てたではないか！ご存知であるのだろうか？紹介してくれ！この通りだ！・・・ダメ、だろうか？」

「いや、ダメなんてことはないのだけれど、しかし神原、僕はエピソードのことを知ってはいてもエピソードの居場所とかは分からないだ。ごめんな」

「そうなのか？いや、まあいい。阿良々木先輩が謝る必要なんてないぞ！こちらこそ無理を言っつてすまなかつた」

「あ、千石………… いや、よそう——アイツとはもう会わない」

「あ、こよみお兄ちゃん………… ダメ——あの人とはもう会わない。

あ、このセリフ漫画に使えそう」

「『羽川と！二回も話せる!!』とか思ったか人間。それは残念だったにや！二回目の羽川はこの俺にや！」

「殺せ！もういつそのこと殺せ!!羽川とお喋りできない人生なんて何の意味もない!!!」

「まあそうにやよ人間。そんなにやこと言っていたら俺のご主人も、そ

れにお前の彼女さんもかにやしんじまうにや」

「……」

「なんにや？俺の顔ににやにか付いているかにや？」

「いや、お前でもまともなことを言うんだなって」

「にやつはははははは！にやんだそんなことかにや！——人間が歳食って体が成長したように俺もご主人と同じ年を積み重ねて少しくらい成長するにや」

「成長——か」

「どこを見ているのかは知らにやいが。人間、ご主人に嫌われても知らにやいぞ？」

「止まれえ！コラアッアッアッ！！テメエ、今すぐ止まれやオラアッアッアッ！！」

「火憐ちゃん……性格変わったなあ」

「アッツブネエッ！テメエッ！フッ殺スゾコラアッアッ！！免許持つてなかったら覚悟しとけよ！！」

「ハンドル人格ってやつなのだろうけれど、交通部門って大変なんだなあ……」

「あ、お兄ちゃん」

「よお月火ちゃん、帰っていたのか」

「うん！——またすぐに出かけるつもりだけれどね」

「そうか、まあそれでもゆっくりしていけよ。ここはお前の家でもあるんだからな」

「うん！また帰ってくるからその時はゆっくりするよ。それじゃあねお兄ちゃん、グッバイー！」

「おう！——月火ちゃんは……変わらねえな」